

# 対人葛藤場面における謝罪行動と許しに関する発達的研究

(中間報告)

上智大学大学院 早川 貴子

## Developmental Study about Relationship between Apologizing Behavior and Forgiveness in Conflicting Situation

Graduate School of Sophia University

HAYAKAWA, Takako

### 要 約

本研究では、謝罪行動に関する研究のレビューを行った。謝罪行動には、謝罪行動を行う加害者側の立場と謝罪行動を受ける被害者の立場の両方があり、これまでの研究では、加害者・被害者のそれぞれの立場から検討がなされている。これらの研究から、謝罪行動は対人葛藤を解決するために用いられる有効な方略であり、加害者と被害者の対人関係を円滑にするものであるといえる。しかし、これらの研究の多くは、成人を対象としており、子どもを対象とした研究が不十分であるように思われる。特に、謝罪行動と許しの関連に関する研究が不足しており、この点に関して今後検討していく必要があると考えた。

**【キー・ワード】 謝罪行動, 加害者, 被害者, 許し**

### Abstract

This paper is a review of the preceding studies on apologizing behaviors. There are two types of positions: the perpetrator and the victim. Also, the studies suggest that apologizing behavior is an effective strategy to smoothen the personal relationship between the perpetrator and the victim. However, most of the studies focus on adults' apologizing behavior, and there are few studies about younger children's. Future research needs to focus on younger children, especially on the relationship between apologizing behaviors and forgiveness.

**【Key Words】 apology, perpetrator, victim, forgiveness**

私たちは日常的に、人との関係を難しくするようなトラブルに遭遇することがある。しかし、近年、些細なトラブルが当事者だけでは解決されず、他の人を巻き込むような大きな問題になったり、事件にまで発展したりすることを耳にする。このようなトラブルを解決するためには、弁解、正当化、謝罪行動など様々な方略がある。その中でも、謝罪行動は、葛藤解決のために最も頻繁に用いられる方

略であり、対人関係を円滑なものにする上で非常に有効なものとされる。

謝罪行動とは、何らかの加害行為あるいは不快行為があった場合に、その行為者が、その加害行為の責任が自分にあると認識した上で、これに対して補償しようとする行為であり、その行為によって行為者と相手（行為を受けた者）との均衡を回復しようとするものである（Holmes, 1989）。なお、本論文では、加害行為（不快行為を含む）を行った者を「加害者」、加害行為を受けたと感じた者を「被害者」と呼ぶこととする。

謝罪行動の研究は、社会心理学的な分野だけではなく発達心理学的な分野でも取り上げられ、多くの研究がなされている。一口に謝罪行動といっても、謝罪行動を行う加害者の立場と謝罪行動を受ける被害者の立場の両方があり、これまでの研究では、加害者・被害者のそれぞれの立場から検討がなされている。加害者の立場では、謝罪行動が行われる状況や要因などの謝罪行動の生起に関する研究だけではなく、謝罪行動の性差や文化差などに関する研究が行われている。被害者の立場では、謝罪行動の効果に関する研究や謝罪行動による許しに関する研究が行われている。特に許しは、本質的な意味でのトラブルの解決をもたらすものと考えられることから、謝罪行動と許しの関連について着目する事は重要な事であるといえよう。これまで謝罪行動の研究の多くは、成人を対象としてなされており、まずこれらの研究について概観していくことは意義深い事であると考ええる。その後、子どもを対象とした研究において、謝罪行動を子どもがどのように獲得していき、日常生活の中で用いていくのかについて概観し、今後の課題について検討を行う。

## 1. 成人を対象とする研究

### 1) 加害者の立場からの謝罪行動

#### 1-1. 謝罪行動の生起に関する研究

加害者の立場から捉えられる謝罪行動に関しては、まず謝罪行動がどのような文脈で、どのように用いられているのかについての研究が行われている。Schlenker & Darby (1981) は、大学生を対象に、シナリオを用いて、主人公が犯した過失の程度と加害の責任が謝罪行動の生起に及ぼす影響について検討した。その際、謝罪行動の様式として、①「ごめんなさい」とだけいう (say "Pardon me"), ②「どうもすみません」という (say "I'm sorry"), ③自責の感情を表す, ④被害者に助けを申し出る, ⑤被害者の許しを乞うために何事か言ったり行ったりする, ⑥その状況に対して自ら厳しく批判するという6種類の謝罪行動を提示して検討している。その結果、加害の責任がなく、過失の結果が些細なときに比べ、加害の責任があり、過失の結果がよりネガティブになる場合の方が、「どうもすみません」と言うことや、自責の念を示すこと、被害者に許しを乞うなど多くの様式を含んだ謝罪行動を用いることが示された。

#### 1-2. 謝罪行動の性差に関する先行研究

謝罪行動の性差については、サブカルチャーとしての性差も大きな違いをもたらす要因の一つであることを示唆する研究が多くみられる (Olstain & Cohen 1983; Brown & Levinson, 1987; Holmes, 1989, 1990; Itoi, Ohbuchi & Fukuno, 1996 など)。Brown & Levinson (1987) や Holmes (1989)

は、謝罪行動の性差に関する研究を行い、男性よりも女性の方がより謝罪行動を行っていることを見出した。女性は、その後の関係を維持するために謝罪行動を行っていることが示された。一方男性は、加害者の面目や社会的地位を維持することを慮るために謝罪行動を行う傾向があることが示された。これらのことから、男性と女性では謝罪行動の機能が異なっていることが考えられる。

Taki (2001) は、これらの研究を受けて、日本の大学生に質問紙を用いて、謝罪行動がどのような場面で用いられるかについて調査している。その際、性別や力関係に関しても検討している。その結果、男性は、同性の男性には謝罪行動をしないことが示された。これには、男性は、同じ男性に何も言わなくても受け入れられると感じているゆえに、謝罪行動が少ないとの指摘がある。反対に、女性は、謝罪行動が多く、関係性がスムーズになるように効果的に謝罪行動を用いていることが示唆された。

### 1-3. 比較文化研究

謝罪行動に関しては、多くの比較文化研究がなされており、文化によって謝罪行動の重要性が異なることが示されている。Itoi, Ohbuchi & Fukuno (1996) は、アメリカ人と日本人を対象に、シナリオを用いて比較文化研究を行っている。その結果、日本人は、自己主張的行動ではない、謝罪行動や弁解といった怒りを和らげるような行為をより好むことが示された。また、日本人は、親しくない関係の人には謝罪行動を用いず、拒否や何の配慮もしないことが示された。Tanaka (1991) は、物語を用いて、日本人と英語話者の謝罪行動を比較検討している。その際、謝罪行動が、相手との距離感や関係性によって異なるのかについても検討している。その結果、日本人は、社会的距離と相手との関係に影響を受けていた。また、日本人の方が、英語話者よりも家族のメンバーの過失に対して謝罪行動を行っていたことが示された。

## 2) 被害者の立場から見た謝罪行動の認識

### 2-1. 謝罪行動の効果に関する研究

加害者から謝罪行動が行われた際の謝罪行動の効果に関する研究が行われている。Ohbuchi, Kameda & Agrie (1989) は、実験状況の中で謝罪行動を行う必要があるような場面を実際に作り出して研究を行った。その際、実験実施者の謝罪行動の有無で条件を設定し、謝罪行動の効果について検討を行っている。その結果、謝罪行動には、加害者に対する被害者の攻撃抑制効果や、印象の改善などの被害者の内的状態に影響を与えることが明らかにされている。また、Fukuno & Ohbuchi (1998) は、仮想場面のシナリオを用いて謝罪行動に関して、過失の大きさを含めて検討している。その結果、謝罪行動の効果に関しては、Ohbuchi et al. (1989) と同様の結果を得ている。また、過失が大きくなると、謝罪行動がより効果的に働くことが示された。

### 2-2. 謝罪行動と許しに関する研究

謝罪行動がなされたと被害者が感じる場合、被害者の中に起こる変化としては、加害者に対する許しが生じると考えられる。Couch, Jones & Moore (1999) は、加害者から謝罪行動が行われる事で加

害行為が許されるということを示している。一方、Fukuno & Ohbuchi (1998)では、加害者の謝罪行動は被害者の許しに影響するとはいえず、他の研究の結果とは異なっていた。

McCullough, Rachal, Sandage, Worthington, Brown, & Hight (1998) は、許しについてさらに検討し、罰が当たればいいと強く思う「復讐」と、相手を遠ざけたい、相手を避けたいと強く思う「回避」に分けて捉え、尺度の作成を行うとともに、許しのプロセスについて検討している。パス解析の結果から、被害者が感じた「謝罪の程度」から、加害者への「共感」に正のパスが認められ、「共感」から「復讐」と「回避」へ負のパスが見られた。つまり、被害者が加害者から謝罪されたと感じられ、被害者が加害者に対して共感できると、被害者は加害者を許すことができる事が示唆された。

被害者が加害者を許すにあたり、被害者が加害者の謝罪行動をどのように評価するのか、どのような観点から加害者の行為や謝罪を受けるのかによって、被害者の許しが異なる事が示されている。早川・荻野 (2008) は、加害者の謝罪の言葉と情動表出行動の組合せによる謝罪行動が、被害者の謝罪の評価にどのように影響を与えるのかについて検討した。また、加害者の謝罪行動に対する被害者の評価が、許しにどのように影響を与えるのかについて検討した。その結果、被害者にとって、加害者の謝罪の言葉があり、罪悪感を伴うと被害者が認識する行動を示す謝罪が最も評価できる謝罪であることが示された。また、被害者が加害者の謝罪を評価できると、許せることが示された。Takaku, Weiner & Ohbuchi (2001) は、被害者の持つ視点によって、加害者の謝罪行動に対する許しがどのように異なるのかについて検討した。その結果、被害者が加害者と同じような経験を思い出したときに加害者を最も許せることが示された。

### 3) まとめ

成人を対象とする謝罪行動に関する研究は、加害者の立場、被害者の立場とも様々な側面からの検討が行われている。これらの研究から、謝罪行動は対人葛藤を解決するために用いられる有効な方略であり、加害者と被害者の対人関係を円滑にするものであるといえる。また、日本は謝罪行動が用いられやすい文化であることから、謝罪行動を深く知るためには、日本人を対象とする研究を更に重ねる事が重要であろう。

## 2. 子どもを対象とする研究

### 1) 加害者の立場に関する研究

謝罪行動は、責任と罪悪感の認識があったときに行われやすい (Tedeschi & Riordan, 1981)。この謝罪行動に伴う罪悪感はどのように発達していくのであろうか。罪悪感についての研究をみるとともに子どもの謝罪行動の研究について概観する。

#### 1-1. 罪悪感の発達

謝罪行動を行う前に加害者が感じるものとして、主に取り上げられているのが、自らの行為に対して悪いと思うこと、つまり罪悪感である。この罪悪感は、適切に機能することによって、悪事を防ぎ、償いや許しを求める行動を刺激すると考えられ、向社会的行動を促進する (Ausubel, 1955; Chapman,

Zhan-Waxler, Cooperman & Iannotti, 1987; Williams & Bybee, 1994)。この罪悪感の発達について Hoffman (1982) は、罪悪感の発達を、他人に身体的損傷を与えたり、痛みを引き起こしたりしたことについての罪悪感から、他人の感情を傷つけたことについての罪悪感へ、さらにはその場の状況を越えて他人に危害を与えたことについての罪悪感へという発達過程であると述べている。Mascolo & Fischer (1995) は、Hoffman (1982) の枠組みに、Zahn-Waxler & Radke-Yarrow (1982) や Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, Wagner & Chapman (1992) などの研究をまとめて肉付けし、罪悪感の発達の過程を示した。その概要については以下の通りである。

- (1) 8ヶ月あるいは9ヶ月の初めでは、子どもたちは、自分の意図的な行動が相手を泣かせた場合に、泣かせてしまった相手の立場に立った共感的な苦痛を感じている。
- (2) 4・5歳になるまでに、子どもたちはより洗練された他人のイメージを構成し始めるが、そこには社会的返報性の必要性も含まれている。子どもたちは、相手が求めてきた要求に自分が応じて行動しなかったときには罪悪感を感じることができるようになる。
- (3) 6歳から8歳になるまでに、子どもたちは義務を果たさなかったことや約束を破ったことについて罪悪感を感じるようになる。
- (4) 10歳から12歳になるまでに、子どもたちはどう他人を扱ったらよいかについての、一般的で抽象的な道徳的規則を犯すと罪悪感を感じる。また、道徳的な欠点を自分たちのせいにすることができ、友達との間の尊重すべき合意といった一般的規則を犯した場合に罪悪感を感じることができ。

このように罪悪感とは、幼児期から児童期にかけて、目に見えるような身体的な損傷に対する罪悪感から、より抽象的、一般化された感情のような高次の罪悪感へと発達するのである。

## 1-2. 謝罪行動の発達

謝罪行動の発達については次のような研究がある。松永 (1993) は、保育園での自由遊び場面について、0歳児から卒園までを縦断的に観察した中で、1歳半頃には頭を下げておじぎをする行為や相手の頭をなでる行為のような身体的表現による謝罪が見られたとしている。また、言葉による謝罪は2歳頃から見られ、4歳頃になると謝罪の言語表現にもバラエティが生じ、相手に謝るだけでなく、償いなど相手の苦痛の原因を取り除く方向での謝罪も見られることが報告されている。また、中川・山崎 (2005) は、幼児を対象に、謝罪する際に責任を受容し、罪悪感を認識するのかを確認する事によって、責任を受容と罪悪感の認識が必要とされる誠実な謝罪の出現時期を明らかにした。その結果、6歳児では、ほとんどの者が謝罪する際に責任を受容し罪悪感を認識すると回答したのに対し、5歳児ではほとんどの者が責任を受容すると回答したものの、罪悪感を認識すると回答した者は約半数に留まった。このことから、ほとんどの子どもにおいて誠実な謝罪の必要条件が整うのは6歳児になっ

てからであることが示された。

また、謝罪行動に及ぼす要因である親密性や意図性などが謝罪行動の生起にどのように影響するのかに関する研究が幼児期を対象として行われている。中川・山崎（2004）は幼児を対象に親密性の高低がもの取り合い場面での加害者の謝罪行動に及ぼす影響を検討した。その結果、4歳児よりも6歳児で謝罪行動の生起率が高いことを示した。4歳児は親密性の高い相手には何らかの目的を達成するために行われる道具的な謝罪を用いていた。6歳児は親密性の低い相手には道具的謝罪を、親密性が高い相手には責任を受容し、罪悪感を認識した上で行われる誠実な謝罪を用いることが明らかとなった。早川（投稿中）は、幼児期を対象に、加害行為の意図性が加害者の謝罪行動を必要とするものの予測に与える影響について検討した。その結果、4歳児では、謝罪行動を行うと予測しない事が示された。5歳児では、意図的・偶発的場面で一貫して謝罪行動を行うと予測する者だけではなく、意図的場面よりも偶発的場面で謝罪行動を行うと予測する者が多かった。一方、6歳児では、意図的・偶発的場面で一貫して謝罪行動を行うと予測することが示された。

## 2) 被害者の立場から見た謝罪行動の認識

### 2-1. 謝罪行動の効果に関する研究

成人同様、子どもを対象とした謝罪行動の効果に関する研究が行われている。その際、謝罪行動に及ぼす要因である、加害者に対する事前の評価や加害行為後の態度、加害行為の意図性なども含めて検討が行われている。加害者に対する事前の評価と加害行為後の態度の要因について Darby & Schlenker（1989）は、小学2年生と小学5年生を対象に、シナリオを用いて検討している。その結果、謝罪行動は、加害者の印象の改善や罰の軽減などに影響を与える事が示唆されている。年齢差が見られ、2年生の子どもたちは、事前評価や行為後の態度が悪い加害者が罰せられることを心配していた。5年生の子どもたちは、反対に、事前評価や行為後の態度が悪い加害者に対する罰に関して比較的無関心であった。事前の評価や行為後の態度が悪い加害者が謝罪行動を行うと、単に罰を避けたいが為に謝罪行動を行っているとは見なされなかった。Ohbuchi & Sato（1994）は、小学2年生と小学5年生を対象にして、加害行為の意図性が謝罪行動の効果にどのように影響をするのかについて検討を行っている。その結果、2年生の子どもたちは、謝罪行動の有無に関わらず、道徳的な判断を用いていた。5年生の子どもたちは、謝罪をした加害者を、謝罪をしなかった加害者よりも加害行為がより意図的でなく、後悔の念を持っていると受け止め、さらに、謝罪をした加害者に対して良い印象を持っていることが示された。

### 2-2. 謝罪行動と許しに関する研究

Darby & Schlenker（1982）は、幼児期、児童期、思春期を対象に、謝罪行動と許しの関連について検討している。その結果、加害者から謝罪行動が行われることで被害者は加害者を許せることが示された。これには年齢差が認められ、他の学年の子どもより思春期の子どもの方が、加害者から謝罪行動が行われることによって加害者を許すことができることが示されている。また、Ohbuchi & Sato（1994）は、小学2年生と小学5年生を対象にして、謝罪行動と許しの関連について検討している。

その際、加害行為の意図性についても検討している。その結果、2年生の子どもは謝罪行動が許しに影響していなかった。5年生の子どもは、加害行為の意図性に関わらず、加害者から謝罪行動が行われることで許すことができることが示された。

### 3) まとめ

謝罪行動は幼児期から認められ、加齢に伴いながら、日常の中で使用できるようになっていくことが示されている。謝罪行動には年齢差が認められ、それぞれの年齢で特徴が見られている。このことは、謝罪行動を捉える上で興味深いといえるであろう。

## 3. 今後の課題

子どもを対象とした謝罪行動の研究は、成人を対象としたものよりも少なく、検討が不十分であるように思われる。先行研究のレビューから、次の3つの点について今後検討し、発展させていく必要があると考えられる。

第1に、研究の内容について述べる。謝罪行動と被害者の中に起こることが予想される許しの関連に関する研究は、成人を対象に検討がなされたものが数多く存在する一方で、子どもを対象として検討されたものはほとんど見受けられない。現在の子どもがたちがトラブルを解決する際に謝罪行動がどのような影響を与えるのか、また子ども達にとって謝罪行動が果たす効果や機能はどのようなものなのかを知るために、謝罪行動と許しの関連について今後検討する必要があるだろう。

第2に、研究の方法に関することについて述べる。Ohbuchi et al. (1989) が、実験的に謝罪をする状況を作り検討している以外は、仮想的なシナリオを用いた方法が主である。この仮想的なシナリオの内容もバラエティに富んでおり、今後、対象者の日常生活に即したシナリオの内容を吟味して用いることも大切であろう。また、子どもたちにシナリオを提示する場合にも、指人形や紙芝居など、状況を分かりやすくする材料を用いることも重要であろう。

第3に、研究の対象に関することである。謝罪行動の研究は、対象者がほとんど大学生であり、児童期から思春期の子どもを対象にした研究はほとんどない。今後、謝罪行動を獲得し、それを日常の中で用いていく事が可能となる子どもの時期を対象に、謝罪行動そのものだけではなく、謝罪行動の背後にある情動や対人関係の調整のあり方など様々な側面に焦点を当てた研究を行うことが必要となるだろう。

## 引用文献

- Ausubel, D. P. (1955). Relationships between shame and guilt in the socializing process. *Psychological Review*, **62**, 378-390.
- Brown, P. & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chapman, M., Zahn-Waxler, C., Cooperman, G., & Iannotti, R. (1987). Empathy and

- responsibility in the motivation of children's helping. *Developmental Psychology*, **23**, 140-145.
- Couch, L.L., Jones, W. H. & Moore, D. S. (1999). Buffering the effects of betrayal: The role of apology, forgiveness, and commitment. In J. M. Adams, & W. H. Jones, (Eds.), *Handbook of interpersonal commitment and relationship stability*. Pp.451-469.
- Darby, B. W., & Schlenker, B. R. (1982). Children's reactions to apology. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 742-753.
- Darby, B. W., & Schlenker, B. R. (1989). Children's reactions to transgressions: effects of the actor's apology, reputation and remorse. *British Journal of Social Psychology*, **28**, 353-364.
- Fukuno, M., & Ohbuchi, K. (1998). How effective are different accounts of harm-doing in softening victims' reactions? A scenario investigation of the effects of severity, relationship, and culture. *Asian Journal of Social Psychology*, **1**, 167-178.
- 早川貴子・荻野美佐子 (2008). 被害者の許しに対する加害者の謝罪の言葉と常道表出行動が与える影響, 上智大学心理学年報, 印刷中
- 早川貴子 投稿中 幼児の謝罪行動に対する加害行為の意図性の影響.
- Hoffman, M. L. (1982). Development of prosocial motivation: Emathy and guilt. In N. Eisenberg, (ed) *The development of prosocial behavior*, New York, Academic Press, Pp.281-313.
- Holmes, J. (1989). Sex difference and apologies: One aspects of communicative competence. *Applied Linguistics*, **10**(2), 194-213.
- Holmes, J. (1990). Apologies in New Zealand and English. *Language in Society*, **19**, 155-199.
- Itoi, R., Ohbuchi, K. & Fukuno, M. (1996). A cross-cultural study of preference of accounts: Relationship closeness, harm severity, and motives of account making *Journal of Applied Social Psychology*, **26**, 913-934.
- 松永あけみ (1993). 子ども (幼児) の世界の謝罪 日本語学, **12**, 84-92.
- Mascolo, M. F., & Fischer, K. W. (1995). Developmental transformations in appraisals for pride, shame, and guilt. In J. P. Tangney & K. M. Fischer(eds) *Self-conscious emotions*, New York: Guilford Press. Pp64-113.
- McCullough, M. E., Rachal, K. C., Sandage, S. J., Worthington, E. L. Jr., Brown, S. W., & Hight, T. L. (1998). Interpersonal forgiving in close relationships: II. Theoretical elaboration and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1586-1603.
- 中川美和・山崎晃 (2004). 対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連 教育心理学研究, **52**, 159-169.
- 中川美和・山崎晃 (2005). 幼児の誠実な謝罪に他者感情推測が及ぼす影響 発達心理学研究, **16**, 165-174.
- Ohbuchi, K., Kameda, M., & Agarie, N. (1989). Apology as aggression control: Its role in mediating appraisal of and response to harm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 219-227.



- Ohbuchi, K., & Sato, K. (1994). Children's reactions to mitigating accounts: Apologies, excuses, and intentionality of harm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **134**, 5-17.
- Olshain, E & A. D. Cohen. (1983). Apology: A speech act set In N. Wolfson & E. Judd(eds): *Sociolinguistics and Language Acquisition*. Rowley, Mass: Newbury House.
- Schlenker, B. R., & Darby, B. W. (1981). The use of apologies in social predicaments. *Social Psychology Quarterly*, **44**, 271-278.
- Takaku, S., Weiner, B., & Ohbuchi, K. (2001). A cross-cultural examination of the effects of apology and perspective taking on forgiveness. *Journal of Language and Social psychology*, **20**, 144-166.
- Taki, Y. (2001). Politeness strategies: Apology strategies by Japanese college students. 言語文化研究 **20**(2), 29-45.
- Tanaka, N. (1991). An investigation of apology : Japanese in comparison with Australian. *Meikai Journal*, **4**, 35-53.
- Tedeschi, J. T. & Riordan, C. A., (1981). Impression management and prosocial behavior following transgression. In Tedeschi (Ed.) *Impression management and prosocial theory and social psychological research*. Academic Press. 223-244.
- Williams, C., & Bybee, J. (1994). What do children feel guilty about? Developmental and gender differences. *Developmental Psychology*, **30**, 617-623.
- Zahn-Waxler, C., & Radke-Yarrow, M. (1982). The development of altruism: Alternative research strategies. In N. Eisenberg (Ed.), *The development of prosocial behavior* New York: Academic Press. pp. 109-138.
- Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M., Wagner, E., & Chapman, M. (1992). Development of concern for others. *Developmental Psychology*, **28**(1), 126-136.

